家城文書⑤

おやさと研究所員
安井　幹夫　*Mikio Yasui*

前々号（2013.No.11）「病気ニも次のよふな次第て有舛」より続き。

とのよふないたみなやみもでき物も
ねつもくたりも皆ほこりやて
このさわりて引いけんもりんふくも
皆めい〳〵にしやんしてみよ
今迄に心得ちがいありたとて
日がきたらいて見ゆるしていた
此そふじむつかしよふであるけれど
病とゆうてないとゆてをく
日々に身の内さわりついたなら
これわ月日の手入れなるそや
とのよふなせつない事がありたとて
やまいでわない親の残念
以上述る通りて、八つの埃りの祓除ニよ（52 オ）
つて、所謂薬の手余りと称せらるゝ大病人が、救斎せらるゝのであり舛。実例の一分部ハ道の友誌上出て有舛か其他（52 ウ）

続いて、「八ツノ埃善悪ノ歌」が記される。これは、心遣いということからすると、必ずしもすべてが「ほこり」となるわけではなく、ほしいといっても、善もあれば悪もある。こうした点について、具体例を挙げて歌の形式で述べたものである。この内容については、すでに（72）において、一部翻刻しているが、あらためて、全部を翻刻紹介しておこう。

八ツノ埃善悪ノ歌

ほしい善
何ものがほしいと思ふ心あらば
身をはたらかせとれや世の人
悪
はてしなくほしいと思ふ心こそ
いたみなやみとなるそ世の人
をしい善
さゝいなるものをも神の恵そと
深く思ふてをしめ世の人
悪
身をしみや骨のをしみや出しおしみ
これが病となるそ世の人
かわい善
へたてなく人も我身もとも〳〵に
かわい心をもてや世の人
悪
我みのみかわゆく思ふ心こそ
なやみの元となるそ世の人　（53 オ）
にくい善
己が身や己か心の其罪を
日々ににくみて通れ世の人
悪
己がみお思わで人おにくみなば
すへわいたみとなるぞ世の人
うらみ善
悪なる我身をう【ら】み人のみを
うらまで道を通れ世の人
悪
をのが罪思わで人をうらむこそ
病の元と知れやよの人
はらだち善
立はらも立たずなるまでたんのふを
常に思てとふれ世の人
悪
人をせめ神をうらみて腹たてる
これがほこりとなる世の人
こふまん善
高きよりひくきぞ楽しへりくだり
ふもとの里に住や世の人　（53 ウ）
悪
ひくき身の□き心をもつなれば
世にたゝれぬと知れや世の人
よくの善
よくにても道にかな為るよくなれば
日々つこふでとうれ世の人
八埃のもとはよくなりわたくしの
よくをはらいてかせげよの人

一日の心定めて百年とをも一どありし
をし為かしこき
はら〳〵と袖に涙の露うけてむかしを
侮る人そやさしき
道の為つくすといふそをろけなき
身のためつくす事おわすれて
人のため我をわすれてつくさなむ
すべてのものを神ニさゝげて
草むらにすたくほたるをみるにつけ
光りなまみのはつかしきかな　（54 オ）

慈悲乃御話

私ハ慈悲と云ふ題で御話を、暫く取次をさせて頂ます。
私共御互は、何一ツ不自う不足なく、結構に暮させて頂いて居ますのは、どなたの御蔭で御座いましよか。申すまでも無く、皆神様の御守護に依るので有舛。神様わ我々人間の為に、此結構なる世界を御造り、海にわ海の物、陸にわ陸の物を育、食る物旬に應じ、時に合せて、寒い時にわ暖こふして、住るよふ、暑い時にわ涼くして、凌けるよふ。幾億萬年の昔ヨリ、今におき日夜（54 ウ）
御守護下されて有ので御座います。御教典にも、萬物の生成化育、息ざる所以のものは、神明調攝の天理に依る、と御座いま

して、何も彼も皆、神様の御守護に依らない者は、更に有りません。此世界は、神様の御慈悲に依て、造り出された世界で有舛から、神様の御慈悲は天地の間に充満〈ミチミチ〉て居るので有舛。然るに、吾々人間は、神様の深い思召や、厚い御恩が分りませんから、此身体一ツてさゑ、我身我物と思い違いを致しまして自分の（55 オ）

都合のよい事ばかり考ゑ、他人の迷惑や難義は、之をよそに見て、只、自分さゑ好けりや好い、と云風に、何事を致しましても、目先の勘定を先にたて、身引き身勝ての心計り遣い、吾と吾てに難を招き、くを拵ゑ、そふして物事思ふよふならん、思うよふいかん、と云うて、不足に不足重ねて居るので御座います。

元々神様か人間を御造り下さりましたのわ、陽気を見たい、見世たいが神様のをもわく、と御聞かせ下さりましたが、今日、此世界にをきまして、日々結構と喜び、楽しく暮して居ます者がとれ（55 ウ）

丈あるでありましよ。中にわ、此結構なる世界を苦の世界て有、くの世であると、勝てに道理をつけて、不足に思て暮して居る人もあり舛。御神楽歌にわ、こゝわこの世のごくらくや、共出て有舛。月【目】にわ美しき色を見て楽しめるよふ、耳にわ楽しき聲を聞いて楽しめるよふ、野に出ても、山に入つても、天然の楽【しみ】は到る処に與えられてあるのであり舛。此結構なる世界を、結構と喜べないのわ、とうゆうもので御座いましよ。慾にきりないどろ水や、心すみきれ御苦楽【極楽】や、と御説下されてあり舛。人間にわ (56 オ)

心の慾と云者がありマシて、充分の上にも充分を思い、結構の上にも結構を思て、ならぬ事を無理思案致しますから、不足が湧きます。例て見ますれば、底のない入物に物をつめるよふな物で、なんぼ詰てもつめても、底かないから、是で一ばい、是で充分と云う事は有ません。人間ハ足る事をしらなければ、とれたけ長生を致しましても、足らんたらんで生がい安心する事もできず、ぐちと不足で、此の借物を返してしまうので有舛。人間寿命にも限りか有舛。すれば品物にも限りが有舛。限り有（56 ウ）

者を以て、限りない心の慾を満すにハ、とても出来る者てはありません。上ニわ上があつて、とこ迄いつてもは際〈ハテ〉しの無いので有舛。身分過たる事を思わず、八分通り叶へば足る事を知り、たんのふすればこそ、日々結構と喜へるので有舛。昔の人も上見たらほしい星いて星ばかり。下見て暮せ星のけわなし、とそわれて有舛から、自分より難義な人や、自分より不自由な人をみて暮せば、決して心の不足は起きて来ません、のて御座いま【す】せん。

神様の御言葉にも不足は切る理て有、とも御聞せ下されて有舛。凡そ世の中に何か恐ろしいと申しても、心の不足より恐ろしい物はありません、（57 オ）

思い舛。世か進み、人がかしこくなりますのは、不足を満たさそふと思て、一生懸命に心を働かし、骨折【ほねおり】して折【おり】ます。其外多くの人の中にわ、身上か不自由で働けない方も有舛。又結構な財産かあつても、それをゆづる子供かなくて困る人もあり舛。こふゆうよふに段々かすへ上てみますれば、身上になくは家に有るか。内に無くは外にあるか。皆それ〳〵の思ふにならんと云うので、苦るしで居るので有舛。是らの人々を一ッに寄て、皆自分〳〵の思ふ事を、ゑんりよなくにゆうてみよ、と申しましたら、それこそ實に蚊のなくよふて有ましよ。かよふに（57 ウ）

現在の人々に心の不足のありますのは、眞の安心のできていない證こであります。そんなら人の心の不足と云不足が、すんきりとれて、十人か十人、百人か百人満足して、眞の心がら喜べるのは、どふしたらできるので有ましよか。言葉をかへて申しますれば、不幸の境かいにいて、不幸を不幸と思わず、日々結構、楽しむ道はとふしたで来るので有ましよか。私わ助け一條の眞實なる神様に御すかり申して、神様の救ひに依るより外ニ道はなかろをと思ひ舛。神様は不自由なきよふにしてやろふ、神の心にもたれつけ、と御示し下されまして、神様（58 オ）

へ御すがりすれば、どんな難義も御助けて頂けるので有舛。様【神】様は、吾々人間の親てあり、吾々御互は神様の可愛い子で有舛。親なる神様が、我々人間の切ない苦しみを、何でよそにみて、御過しなさるよふな事がありましよ。神様わ今より七十五、六年以前に、御教祖様の御身上を神の社と貰受け、天下りて、助け一條の此御道を御立遊されたので、我々御互の為に、助を急がれて有のであり舛。是がとりも直さず、我天理教て有ます。

此御道は医者のてあまり捨りも（58 ウ）

のを助けるのは申す迄もなく、我々同□の難じゆな人や不幸な人を救ひあけて、世の中の極楽世界に、連れて通りたい神様の思召から、御つけ下されたもので、人間の思案や悟りてで来た道ては御座いません。此世初めて下された眞實親様の御口を借りて、夜となく晝となく、御傳へ下された事計りて、話一條言葉一ツて、如何なる理も助けると、御聞せ下さりまして、此世界は、神か初めかけ、人間身上は神が造り拵へ、どのよふの事も元なしに出来たものは一つも無いと仰せ下さりましたが、人間は前生の因縁申しまして、生れかわり（59 オ）

出かわりして来た先の世に於て、善事もしてあれば、悪き事もして来たその理を、今世へ持越し、是が其人の因縁となつて、同し此世ゑ同し體を借りなから、仕合善き生れるのと、不仕合せに不幸に生れるのと、色々其境がいが異なつてくるのて有舛。とふゆう中ゑ生れ出るのも、とふゆう中ゑ行合すのも、皆銘々の因縁ありまして、決して人間の支配では御座いません。神様が人々の理を、身分て徳のつんである者は、徳の多い中い出し、埃の多い者は埃の中い出し、それ〳〵其心によつて、御守護下されてあり舛故、今更天をう【ら】み人をと（59 ウ）

がむる事は、更に御座りません。たゞ今日ニ於て、徳をつんて因縁をきらして貰うより外に、道はないのであり舛。徳さいつめば、とんないんゑんても切れて、是迄不幸な人も必す仕合のよい人になれるのであり舛。神様の御言葉に、たんのふは前生のさんけとも申されて有舛。

【　】内は筆者補足。